

ピアホームだより

2021. 10.10

障害者の恋愛はどう向き合える？

当作業所で恋愛から端を発し、問題を引きずっている事例があります。

母でもある当事者が、同じ作業所の男性当事者の広い住宅で同居をし始めました。家庭では受け入れられることがない寂しさからか、特に子供から拒絶を受けていることからか、幾度となく繰り返されて来たことです。

現場では、障がい者の恋愛とどう向き合うのかを考える大きなきっかけとなりました。

今回のケースを顧問医にも相談、病気によるものなら薬物治療対象、本人の持つ異性への指向なら、リハビリ施設で改善を図る...

中々結論の出ることではないですね。

さて、当ホームでは、生活上の禁止事項は一切なしでやってきましたが、恋愛とて同じです。これまでに結婚した当事者も出し、カップルも

生まれています。そのことについては、当所の誇るべきところとも考えています。彼らは、概ね良い方向に向かっていると実感します。

健常者と言われる我々も、一人で生きるのは厳しい。まして、障害者に立ちはだかる社会の壁に一人で立ちはだかるのは、どんなに大変なことでしょうか？だから、障がい者こそ、パートナーが必要と思う所以です。

辛い胸の内を分かち合い、一人が落ち込んだ時にはもう一人がとことんお話を聞く。障害者同士だからこそできることではないでしょうか？

それがお互いのためになる—他者の役に立つという生きがいにも繋がる気がします。

統合失調症を扱った数少ない映画「ビューティフルマインド」を観てください。妻となった、元教え子の助力が最高の薬だったのではありませんか？

しかし、健常者も恋愛は難しい。いや、自我を持った人間の関係が難しいという事かもしれません。

良い時もあれば、喧嘩をして別れると言い出す時が必ずあるのです。そんな時、障がい者の場合、症状の悪化に繋がりがやすく、周りとしてはハラハラドキドキしてしまいます。

先日、別のケースの方にそのような事が起こり、ちょっとした近隣トラブルに発展しました。

当ホーム卒業生もしょっちゅうトラブルを起こし、警察沙汰にまでなっている方がいます。でも、必ず仲直りしています。温かく見守って頂ける寛容な社会であってほしいですね。

そして、私の知っている障害者カップルは、皆、長続きしているのです。

先日、NHK Eテレ「100分de名著」で、上野千鶴子さんが、ボ・ヴォワールの「古い」の解説をしていました。性的であってはいけない人は—老人、子供、障害者—弱者ばかりじゃないですか？保護されている者には恋愛の資格はありませんか？

レジリエンスについて

パラリンピックでレジリエンス—くじけない心—の事を言っていました。亡き友大賀さんが盛んにお話ししてくれていたのを思い出します。

いい言葉です。私たちは、くじけることが無いよう頑張っていきたいものです。

今月の予定

10月14日：順天堂大学付属病院付き添い